

地域リーダー高齢者の若者イメージと 若者との交流に対する期待感

— 「看護学生との交流事業」参加前の調査から —

渡邊裕子¹⁾ 小山尚美¹⁾ 流石ゆり子¹⁾ 河野由乃¹⁾
萩原理恵子¹⁾ 森本清²⁾ 水口哲²⁾

要 旨

「活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」が目的の高齢者のための生涯学習大学校に在学し、看護学生との交流事業に参加した24名を対象に、若者イメージと事業に対する期待感について調査を実施した。対象の地域リーダー高齢者は「世間一般の今どきの20歳代の若者」イメージとして、「話やすいが何を考えているかわからない」という傾向を持っていた。また「若者との交流」への期待度は95.8%と高く、分かり合いたい思いがある一方、自分から知恵を伝授するという意識を持って参加した人は少なかった。交流では、高齢者が老年期の意味を理解し、歳を重ねたからこそ備えている知恵を若い世代に伝授するという意識を持って参加できるような導入と、若者に対する理解し難い感情を払拭し、若者から求められているという実感を持って、自発的、積極的かつ自然に交流を求める姿勢が持てるような企画・調整が必要である。

キーワード：地域リーダー高齢者、若者イメージ、看護学生、交流事業、期待感

I はじめに

「21世紀の少子・高齢社会においては、家族の場以外でも高齢者と子どもをはじめとした多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくことが緊急な課題になっている¹⁾」と言われ、高齢者と他世代間の交流については、様々な取り組みがなされている。

高齢者と若者との交流については、主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究がなされ、高齢者、若者双方に対する効果が確認されている。また、看護学生を対象とした研究では、臨地実習や高齢者に対するインタビューを通じた交流と「高齢者イメージ」に関連した研究は多くある。しかし、世代間交流、特に看護学生との交流が高齢者の「若者イメージ」に及ぼす影響や高齢者の「若者イメージ」の変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証した

ものはほとんどない。

Y県においては、「生涯学習の理念に立ち、人生80年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えるとともに、高齢者の生きがいづくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」を目的に、修業2年間で高齢者が学習する機会を設けている。その中に「若者との交流」という講座があり、看護学生と地域リーダー高齢者が一緒に歌やゲームを楽しんだり、高齢者がライフヒストリーを語り人生の先輩として看護学生に言葉を贈ったりするなど、相互の交流を図っている。この事業は、すでに3年間継続して行われており、参加した高齢者からは「若者と話す機会がもて感銘を覚えた」「若者に対するイメージが変わった」「手応えを感じた」などの感想に加え、「将来の職業

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部

2) 山梨県中北教育事務所

(専攻分野)

老年看護学

地域教育支援

を見据え勉学に励んでいることに拍手を送りたい」や「心ならずも病に臥せておられる方々に光と希望を与えて欲しい」など、人生の先輩から専門職を目指す若者に対する貴重なメッセージをいただいている。このように、交流は異世代間の交流事業として高い評価を得ているが、高齢者の生活に及ぼす効果についての検証は行っていない。

そこで今回、看護学生との交流が高齢者の「若者イメージ」に及ぼす影響や高齢者の「若者イメージ」の変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証するための第一歩として、地域リーダー高齢者が看護学生との交流事業開始前に抱えている若者イメージと交流に対する期待感を明らかにし、今後への示唆を得たので報告する。

II 用語の定義

本研究では、「地域リーダー高齢者」「交流事業」「看護学生」を以下の定義で用いる。

1. 地域リーダー高齢者

Y県が「生涯学習の理念に立ち、人生80年時代の高齢者に対して、専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し、高齢者の学習ニーズに応えるとともに、高齢者の生きがいづくりを支援し、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」を目的に、修業2年間で企画している高齢者のための生涯学習大学校（K学院）に在学している概ね60歳以上の高齢者。

2. 交流事業

K学院の年間プログラムの中にあり、例年6月初旬に実施されている「若者との交流」事業。

3. 看護学生

4年制大学の看護学部看護学科の学生。

III 研究目的

看護学生との交流事業に参加する地域リーダー高齢者の若者イメージと交流に対する期待感を明らかにする。

IV 研究方法

1. 研究デザイン

調査研究（自記式）

2. 調査対象

「活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的とした高齢者のための生涯学習大学校（修業2年間）に在学し、看護学生との交流事業に参加した24名

3. 調査日

平成21年6月6日（土）の「若者との交流」開始直前

4. 調査方法

平成21年6月6日（土）の交流事業開始直前に、交流の企画・運営に関係せず、研究組織に属さない第三者の研究協力者（以下 研究協力者）が研究の概要を文書と口頭で説明後、研究に同意が得られた協力者（以下 調査対象者）に、研究協力者が調査票を一斉配付しその場で回収する。

5. 調査内容

- 1) 基本属性：年齢、性、家族構成、若者と話す機会
- 2) 交流事業への参加動機と期待感：交流への参加動機1項目、交流への期待2項目
- 3) 若者イメージ：甲斐らが「看護学生が高齢者の自宅を訪問し経験談を聞かせていただく」という介入研究の前調査に用いた「若者イメージ尺度²⁾」を参考にした8項目
- 4) 意見・質問：自由記載

6. 分析方法

調査内容の各項目について単純集計を行った後、基本属性（性別、年齢、若者と話す機会と頻度）を独立変数、交流事業への参加動機・交流への期待感・若者イメージを従属変数としクロス集計を行った。自由記載内容は、対象者の思いや意図の文脈が損なわれないように抽出

し、研究者（老年看護学教員）がディスカッションして意味内容を検討した。また若者イメージについては、Mann-Whitney検定により比較した。なお、統計処理にはSPSS16.0J for Windowsを用いた。

7. 倫理的配慮

対象者に本研究の目的・調査内容・調査方法・研究結果の公表・協力の任意性・研究協力を拒否しても不利益は一切生じないこと・同意は撤回できること・データは匿名化され研究目的にのみ使用する旨について記載した文書を用いて口頭で十分な説明を行い、調査票の冒頭には「協力する」「協力しない」の選択肢を付し自由意思を尊重した。なお、本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会の審査にて、『承認』を得ている。

V 結果

1. 基本属性

1) 年齢・性別・同居形態

対象者24名の内訳は、男性15名（62.5%）、女性9名（37.5%）であった。平均年齢は68.6 ± 5.3歳で、75歳未満が20名（83.3%）と多かった。

同居形態では「配偶者と二人暮らし」が13名（54.2%）で最も多く、「孫と同居」は2名（8.3%）であった。

2) 若者と話す機会

「18～30歳以下の若者と話す機会があるか」の間に、11名（45.8%）が「時々ある」、5名（20.8%）が「ある」と回答したが、「ほとんどない」も8名（33.3%）あった。「ある」と「時々ある」の16名に対し「誰とどれくらい話すか」を尋ねた。「最も多く話す若者は誰か」の問いに、「近所の若者」5名（31.3%）、「別居の孫」3名（18.8%）、「その他」8名（50.0%）で、「その他」の内訳は「娘・息子」と「後輩（部下）」が各3名（18.8%）、「学生（ボランティア）」2名（12.5%）であった。

若者と話す頻度は表1に示した。「30分以内

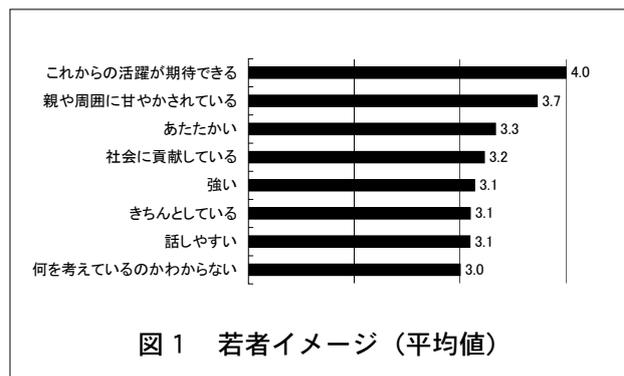
週1回程度」が8名（50.0%）で最も多く、「30分以内毎日」は2名であった。「1時間以上」の2名が話す相手は、いずれも「後輩（部下）」であった。話す内容をみると近所の若者では「挨拶程度」「相手の仕事について」「今の若者の考えていること」、別居の孫では「学校での出来事」、娘・息子と後輩（部下）では「日常会話」であった。また、学生（ボランティア）と「NPO活動に参加しているので活動内容、在り方、生き方全般」について話しているという回答が1名あった。

表1 若者と話す頻度

	n=16 名 (%)		
	挨拶程度	30分以内	1時間以上
毎日	0	2(12.5)	0
週1回程度	2(12.5)	8(50.0)	0
月1回程度	1(6.3)	1(6.3)	0
その他	0	0	2(12.5)

2. 地域リーダー高齢者の若者イメージ

「世間一般の『今どきの20歳代の若者』に対するあなたのイメージについてうかがいます」という設問で、若者イメージ8項目について尋ねた。8項目は「20歳代の若者は、〇〇」という内容で、「非常にそう思う(5)」「ややそう思う(4)」「どちらとも言えない(3)」「あまりそう思わない(2)」「全くそう思わない(1)」の選択肢を設け、それぞれの項目の平均値を図1に示した。「これからの活躍が期待できる(4.0)」,「親や周囲に甘やかされている(3.7)」,「あたたかい(3.3)」の順で高かった。



「とてもそう思う」と「ややそう思う」を「思う」、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を「思わない」として内訳をみると(表2)、「思う」が最も多かったのは「これからの活躍が期待できる」18名(75.0%),次いで「親や周囲に甘やかされている」13名(54.2%)であった。一方「思わない」は「話しやすい」が6名(25.0%)で最も多く、次いで「きちんとしている」と「何を考えているかわからない」が各4名(16.7%)であった。

75歳未満の若者イメージを図2に、75歳以上の若者イメージを図3に示した。「何を考えているかわからない」は、いずれも「どちらとも言えない」が50.0%であったが、「思わない」が75歳以上にはいなかったのに対して、75歳未満では10.0%おり、差のある傾向が見られた(Mann-Whitney検定, $p=0.060$)。また、「話しやすい」では、75歳以上で「思わない」が75.0%に対し、75歳未満では15.0%であり、有意な差が見られた($p=0.034$)。

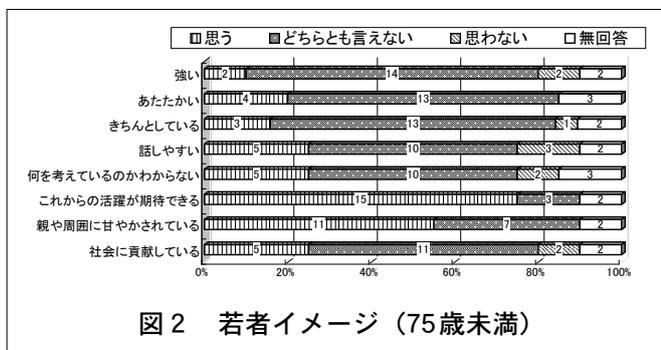


図2 若者イメージ (75歳未満)

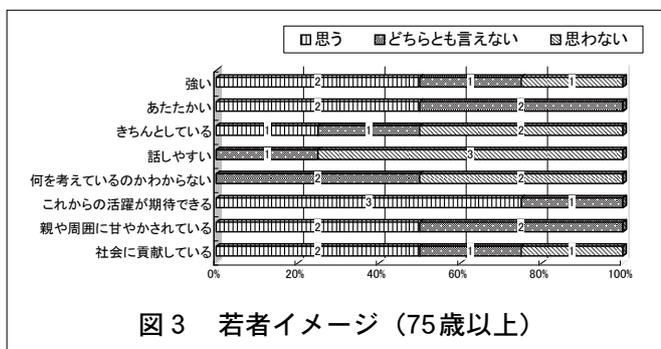


図3 若者イメージ (75歳以上)

次に、性別による若者イメージを図4(男性)・図5(女性)に示した。「これからの活躍が期待できる」は男性では15名中13名(86.7%)が、女性では9名中5名(55.6%)が「思う」と回答しており、平均値でも男性4.2、女性3.6で、有意な差がみられた($p=0.067$)。

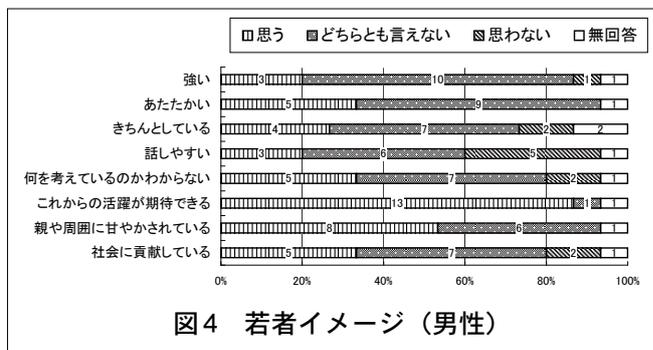


図4 若者イメージ (男性)

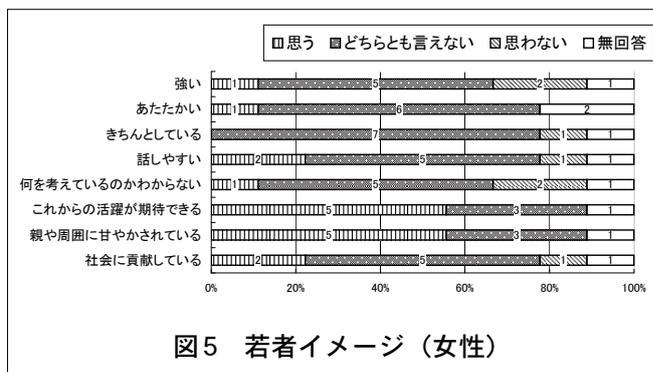


図5 若者イメージ (女性)

次に、話す機会による若者イメージを比較したが、どの項目でも有意な差はみられなかった(表3)。

自由記載欄に、「単純に20歳代の若者と括っているので非常に答えにくい。今の若者は非常に幅広い存在なので、例えば私の知っている若者についてはレベルが1~2上がると思う。しかし、必ずしもそうではないような若者も一生懸命に生きていると思う。でも、この差が新しい未来社会を作っていくと思う」という記載があった。

表2 若者イメージ（内訳）

	n=24 名 (%)			
	思う	どちらとも言えない	思わない	無回答
これからの活躍が期待できる	18(75.0)	4(16.7)	0	2(8.3)
親や周囲に甘やかされている	13(54.2)	9(37.5)	0	2(8.3)
あたたかい	6(25.0)	15(62.5)	0	3(12.5)
社会に貢献している	7(29.2)	12(50.0)	3(12.5)	2(8.3)
何を考えているのかわからない	5(20.8)	12(50.0)	4(16.7)	3(12.5)
話しやすい	5(20.8)	11(45.8)	6(25.0)	2(8.3)
強い	4(16.7)	15(62.5)	3(12.5)	2(8.3)
きちんとしている	4(16.7)	14(58.3)	3(12.5)	3(12.5)

表3 若者と話す機会による高齢者イメージの比較

		n=24					
		ある		ときどきある		ほとんどない	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
社会に貢献している (Mann-Whitney 検定, p=0.135)	思う	1	20.0%	5	45.5%	1	12.5%
	どちらとも言えない	4	80.0%	5	45.5%	3	37.5%
	思わない	0	0.0%	1	9.1%	2	25.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
親や周囲に甘やかされている (Mann-Whitney 検定, p=0.640)	思う	4	80.0%	6	54.5%	3	37.5%
	どちらとも言えない	1	20.0%	5	45.5%	3	37.5%
	思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
これからの活躍が期待できる (Mann-Whitney 検定, p=0.283)	思う	4	80.0%	9	81.8%	5	62.5%
	どちらとも言えない	1	20.0%	2	18.2%	1	12.5%
	思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
何を考えているのかわからない (Mann-Whitney 検定, p=0.784)	思う	4	80.0%	1	9.1%	0	0.0%
	どちらとも言えない	1	20.0%	5	45.5%	6	75.0%
	思わない	0	0.0%	4	36.4%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	1	9.1%	2	25.0%
話しやすい (Mann-Whitney 検定, p=0.933)	思う	2	40.0%	2	18.2%	1	12.5%
	どちらとも言えない	3	60.0%	4	36.4%	4	50.0%
	思わない	0	0.0%	5	45.5%	1	12.5%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
きちんとしている (Mann-Whitney 検定, p=0.572)	思う	1	20.0%	2	18.2%	1	12.5%
	どちらとも言えない	3	60.0%	7	63.6%	4	50.0%
	思わない	1	20.0%	2	18.2%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
あたたかい (Mann-Whitney 検定, p=0.918)	思う	2	40.0%	2	18.2%	2	25.0%
	どちらとも言えない	3	60.0%	8	72.7%	4	50.0%
	思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	1	9.1%	2	25.0%
強い (Mann-Whitney 検定, p=0.807)	思う	0	0.0%	3	27.3%	1	12.5%
	どちらとも言えない	3	60.0%	7	63.6%	5	62.5%
	思わない	2	40.0%	1	9.1%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%

3. 交流事業への参加動機と期待感

1) 交流事業への参加動機

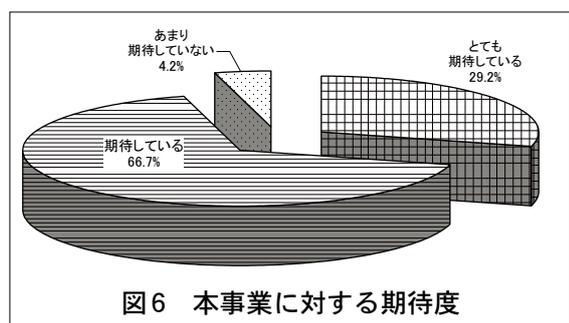
交流への参加動機について、複数回答で質問したところ「若者と話す機会が少ないから」が13名(54.2%),「若者と話すことが好きだから」が8名(33.3%),「看護学生の学びに興味があったから」と「経験者の話を聞き面白そうだから」が各7名(29.2%)の順で多く、「若者に年長者としての知恵を伝授したい」は3名(12.5%)であった(表4)。また「若者に年長者としての知恵を伝授したい」と回答した3名は全員が60歳代であった。

表4 参加動機

	n=24 複数回答	
	人数	割合
若者と話す機会が少ないから	13	54.2%
若者と話すことが好きだから	8	33.3%
看護学生の学びに興味があったから	7	29.2%
経験者の話を聞き面白そうだから	7	29.2%
生涯学習大学の年間計画にあったので	4	16.7%
若者に年長者としての知恵を伝授したいから	3	12.5%
その他	1	4.2%

2) 交流事業への期待

交流への期待度について、4つの選択肢で聞いた結果は図6の通りで、「とても期待している」と「期待している」で95.8%を占め、「全く期待していない」はいなかった。



交流に期待する内容について、複数回答で質問したところ、「若者の話をたくさん聞きたい」が18名(75.0%)で最も多く、次いで「現代の若者を理解したい」15名(62.5%),「若者に自分たちの世代を理解してほしい」9名(37.5%)であった(表5)。

表5 事業に期待する内容

	n=24 複数回答	
	人数	割合
若者の話をたくさん聞きたい	18	75.0%
現代の若者を理解したい	15	62.5%
若者に自分たちの世代を理解してほしい	9	37.5%
自分が若者にたくさん話をしたい	3	12.5%
歌やゲームで楽しい時間を過ごしたい	1	4.2%

VI 考察

1. 地域リーダー高齢者の若者イメージ

若者イメージ8項目について尋ねた結果、「これからの活躍が期待できる」が最も多かった。東京都内の公営団地に居住する60歳以上の女性を対象とした甲斐らの報告³⁾でも、8項目のうち得点が最も高かったのは「期待している」であり、その傾向は一致する結果であった。しかし、女性の平均値で比べても甲斐らの報告では3.0に対して、本研究では3.6と高く、また男性では86.7%が「期待できる」と回答し、平均値も4.2と有意に高かったことから、この傾向は本研究対象者の特性であると考えられる。「今の若者は非常に幅広い存在なので、レベルが1~2上がる人もいるが、必ずしもそうではないような若者も一生懸命に生きており、この差が新しい未来社会を作っていくと思う」と自由記載にあった意見が、若者の活躍を期待する対象者の考えを代表していると言え、一生懸命生きている若者を理解し、期待しながら見守っている年長者としての姿勢が現れている。

一方、「話しやすい」と「何を考えているかわからない」では、75歳以上と75歳未満に差がみられ、75歳未満では「話しやすいが何を考えているかわからない」という傾向が明らかとなった。しかし、交流に期待する内容として、「若者の話をたくさん聞いて理解したい」や「自分たちの世代を理解してほしい」が多かったことから、「話やすいが、何を考えているかわからない」若者と分かり合いたいという対象者の思いがうかがえる。交流で高齢者と交流する看護学生は、高齢者とのコミュニケーション技術についても学んでおり、高齢者の話しを聴

きたいと自ら進んで参加した学生である。岩佐らは⁴⁾、地域在宅超高齢者を対象にした訪問介護プログラム開発の予備的検討において、介入プログラムによる若者イメージの向上が、対人交流が狭量化しがちな超高齢者において地域社会に対する関心や自発的な働きかけの維持に寄与する可能性を示唆している。看護学生が真摯に話を聴く姿勢に触れ、若者が高齢者からの知恵の伝授を求めていることを実感できることで、高齢者が若者に感じている距離感が少なくなり、高齢者側から自発的、積極的な世代間の交流を求める姿勢が生まれてくることが期待できる。

また、医療場面では高齢者が看護の対象となる場面がますます多くなっており、高齢患者やその家族のニーズに応じた看護提供が求められている。しかし、日常の中で高齢者との接触体験が少ない看護学生にとって、高齢者の理解や高齢者との対応に困難を要する場合もある。また、身体面の老化や活動性の低下などのイメージが先行し、高齢者の持っている能力に気づかないまま、養護すべき存在として捉えがちである⁵⁾。看護基礎教育において、学生が高齢者への関心と理解を深められるような教育を実践していくことが必要である。地域の中で生き生きと生活している高齢者と直接交流する機会を持つことは、高齢者の理解を深め、ニーズに応じた適切な看護を実践できる人材の育成に寄与するものと期待できる。

2. 若者との交流に関する期待感

「若者との交流」という交流の趣旨に期待して参加した人が95.8%と圧倒的に多く、参加動機では「若者と話す機会が少ないから」が最も多かった。また交流に期待する内容では、「若者の話をたくさん聞きたい(75.0%)」、「現代の若者を理解したい(62.5%)」が多かった。若者と話す機会はあっても週1回程度30分以内と短い人が半数と多く、3割以上的人是は「若者と話す機会はほとんどない」と回答していたことから、生活の中で若者を理解できるような

交流が十分にはできていないことが推察される。また、「若者と話すことが好き」や「看護学生の学びに興味があった」という人が3割以上おり、4割弱の人が「若者に自分たちの世代を理解してほしい」と回答していたことから、関心のある若者とたくさん話して理解し合う機会として、交流への期待感が大きかったものと考えられる。

一方、「若者に年長者としての知恵を伝授したい」は24名中3名(12.5%)と少なかった。「日常的には、知恵は経験や年齢を重ねた人に備わるものであり、困ったことに対してアドバイスすることができる能力であると考えられている⁶⁾」と言われるように、「知恵」は長い経験によって培われていく能力である。「これまでの研究から、知恵においては多くの認知機能にみられるようなエイジングによる低下はみられないこと、豊かな知恵を形成していくには年齢を重ねるだけでなく、新しい出来事に開放的であるといった性格特性や、職業経験、若い世代との交流などが関連している可能性が明らかになってきている⁷⁾」という報告もある。サクセスフル・エイジングの構成要素には①長寿、②生活の質(QOL)が高い、③Productivity(社会貢献)が高いことがあげられ、Productivityには有償労働、無償労働(家事など)、高齢者の相互扶助、若い世代へのサポートが含まれ、日本において相互扶助の観念は欧米に比べ高いとは言えない⁸⁾。長田は⁹⁾、「中年期と同様のあり方ではなく、自己の成熟という課題との関連で、役割を演じ、社会に参加し、社会貢献をし、創造活動を継続し、そこから、人生の統合感を得、満足や生き甲斐を感じるというのが、サクセスフル・エイジングのひとつのモデルとなるのではないだろうか」と述べている。

本調査においては、「知恵を伝授する」という役割を認識して参加した人は60歳代の3名で、後期高齢者で「知恵の伝授」と回答した人はいなかった。このことから、高齢者が「年長者としての知恵の伝授」という積極的な役割意識を持っているとは言い難い。しかし、「若者

と話す機会がある」人の中に、少数ではあるが「今の若者の考えていること」や「生き方全般」について話しているという回答もあった。活力に満ちた地域づくりの指導者としての役割を意識した行動であると言える。「少子・高齢社会において多世代が共存・協力してコミュニティを形成していくことは緊急課題である¹⁰⁾」と言われ、対人交流が狭量化しがちな高齢者に対して「世代間交流の場」を設定する施策が多い。交流においては、対象が老年期の意味を理解し、歳を重ねたからこそ備えている能力である知恵を若い世代に伝授するという意識を持って参加できる導入が必要である。また、高齢者が若者から「知恵の伝授」を求められているという実感を持つことができ、自発的、積極的かつ自然に交流を求める姿勢が持てるような企画・調整が必要である。

交流の対象は、地域リーダー高齢者であり、高齢社会における相互扶助の中心的役割を担う人たちである。また若い世代との交流が、さらに自己の役割や能力に対する認識を深める機会となり、地域在住高齢者のリーダーとして、高齢者の相互扶助を積極的な推進につながるような働きかけも今後の課題である。

Ⅶ 結論

対象の地域リーダー高齢者は「世間一般の今どきの20歳代の若者」イメージとして、「話やすいが何を考えているかわからない」という傾向を持っていた。また「若者との交流」に期待度は95.8%と高く、分かり合いたい思いがある一方、自分から知恵を伝授するという意識を持って参加した人は少なかった。

本事業においては、対象が老年期の意味を理解し、歳を重ねたからこそ備えている能力である知恵を、若い世代に伝授するという意識を持って参加できるような導入が必要である。また、高齢者が若者に対する理解し難い感情を払拭し、若者から求められているという実感を持つことができ、自発的、積極的かつ自然に交流を求める姿勢が持てるような企画・調整が期待

される。

Ⅷ おわりに

今回、地域リーダー高齢者が看護学生との交流事業開始前に抱えている若者イメージと交流に対する期待感を明らかにした。今回の対象者は、「生涯学習の理念に立ち、活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」を目的に、自ら学習ニーズを持って生涯学習大学校に在学している集団であることから、その結果には限界がある。また「単純に20歳代の若者と括っているので非常に答えにくい」という意見があったように、「看護学生との交流」を前提として参加していたことや「世間一般の『今どきの20歳代の若者』に対するイメージ」という設問には限界があった。

今後は、看護学生との交流が対象者の「若者イメージ」に及ぼす影響や「若者イメージ」の変化が生活に及ぼす効果について検証していくが、この結果を踏まえ、地域在住の一般高齢者に対象を広げて調査・介入を続けていきたいと考える。

謝辞

本研究の実施にあたり、快く調査にご協力くださいました皆様に深く感謝申しあげます。

なお、本研究は平成21年度山梨県立大学看護学部共同研究費の助成を受け、内容の一部は「第40回日本看護学会－地域看護－（2009年11月：松本市）」において発表した。

【引用文献】

- 1) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性、現代のエスプリ第444号、至文堂、7、2004.7.
- 2) 甲斐一郎：ソーシャル・サポート授受の介入研究（世代間交流が高齢者と高校生に与える影響）（研究課題番号10670338）、平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書、資料4-4-5、2002.
- 3) 前掲2）、8.

- 4) 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵他：地域在宅超高齢者における廃用症候群の予防を目指した訪問型介入プログラム「自分史くらぶ」の開発予備的検討，老年社会科学29巻1号，75-83，2007.4.
 - 5) 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究－老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化－，山梨県立看護大学短期大学部紀要 Vol.11 No.1，159，2006.3.
 - 6) 柴田博・長田久雄：老いのところを知る，18，ぎょうせい，2003.
 - 7) 谷口幸一・佐藤眞一：エイジングの心理学 老いについての理解と支援，114，北大路書房，2009.
 - 8) 前掲5)，44-48.
 - 9) 前掲5)，215.
 - 10) 前掲1)，7-8.
- ・ 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.24，322，2004.12.
- ・ 家里かおり・渡邊裕子・倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集 老年看護 Vol.35，82-84，2005.1.
- ・ 一番ヶ瀬康子・進藤貴子：高齢者の心理，一橋出版，2005.
- ・ 大津廣子・足立みゆき・渡邊亜紀子：前期高齢者と後期高齢者が求める看護師像の違い，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.27，287，2007.11.
- ・ 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.24，322，2004.12.
- ・ 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.27，287，2007.11.
- ・ 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.24，322，2004.12.
- ・ 家里かおり・渡邊裕子・倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集 老年看護 Vol.35，82-84，2005.1.
- ・ 一番ヶ瀬康子・進藤貴子：高齢者の心理，一橋出版，2005.

【参考文献】

- ・ 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム "REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果，日本公衆衛生雑誌53巻9号，702-714，2006.9
- ・ 新田淳子・緒方泰子：世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義，日本看護福祉学会誌10巻1号，90-91，2004.6.
- ・ 渡辺直紀・藤原佳典・西真理子他：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム "REPRINTS"(4) 児童の高齢者イメージ，老年社会科学27巻2号，273，2005.6.
- ・ 流石ゆり子・亀山直子：『健康高齢者実習』の意義－学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討－，日本老年看護学会誌 Vol.9 No.1，65-75，2004.11.
- ・ 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果－高齢者に対する年齢と色のイメージ変化より－，山梨県立大学看護学部紀要 Vol.9，35-42，2007.3.
- ・ 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果(第2報)－高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて－，山梨県立大学看護学部紀要 Vol.10，93-101，2008.3
- ・ 勝眞久美子：自律した高齢者との語り合いが看護学生にもたらす効果，日本看護学会論文集 老年看護 Vol.37，172-174，2007.2.
- ・ 仲谷明子・松岡佳子・高田由起子：患者と看護師が求める看護師像の相違，日本看護学会抄録集 看護管理 Vol.39，351，2008.10.

Senior community leader's image of young persons and their expectations for exchanging with them.

-Research prior to participate in "Exchange program with Nursing Students."-

WATANABE Yuko, KOYAMA Takami, SASUGA Yuriko, KOHNO Yoshino, HAGIHARA Rieko, MORIMOTO Kiyoshi, MIZUGUCHI Tetsu

Keywords : Senior community leader's, young person's image, nursing students, exchange program, expectations